

国語創作部門

総評

第一回のコンクールにもかかわらず、全国から、数多くの応募があったことは、大変よろこばしいことです。

全体的な傾向をみると、題材の選び方は良いのですが、主題が明らかでない作品が多かったようです。また、取材した内容を訴えるのに、どのように組み立てるかという点に、もうひと工夫あれば、良い作品になるものかなりありました。

しかし、入賞した作品以外にもすぐれた作品が多くありました。体験したことや、体験を通して感じたり、考えたりしたことをまとめあげることによって、それまでになく過ごしている生活のなかに、とても大切な意味や価値があり、それを発見できたことのよろこびがすなおに表現されていました。

来年度への応募を心から期待しています。

入賞者一覧

最優秀賞

「ぼくの大ばあちゃん」

愛知県愛知教育大学付属岡崎小学校

大見 芳武

2年

「おぼんをむかえて」

愛知県愛知教育大学付属岡崎小学校

末松 美沙

1年

「参観日」

青森県八戸市立豊川小学校

松川 祥子

4年

「弟の入学」

岩手県盛岡市立城南小学校

堀 由紀

2年

「先生のとこやさん」

岩手県盛岡市立城南小学校

井戸 智子

2年

「大きくなったね わたし」

青森県白菊学園小学校

土岐 真由美

5年

「日記（村井くんのこと）」

岩手県盛岡市立城南小学校

石田 かほり

2年

「階段からとびおりて」

東京都五日市町立五日市中学校

安斎 由香

1年

優良賞

「日記（村井くんのこと）」

岩手県盛岡市立城南小学校

石田 かほり

2年

「大きくなったね わたし」

青森県白菊学園小学校

土岐 真由美

5年

「先生のとこやさん」

岩手県盛岡市立城南小学校

井戸 智子

2年

「弟の入学」

岩手県盛岡市立城南小学校

堀 由紀

2年

「参観日」

青森県八戸市立豊川小学校

松川 祥子

4年

「おぼんをむかえて」

愛知県愛知教育大学付属岡崎小学校

末松 美沙

1年

佳作

「年よりの心」

宮城県仙台市立八木山中学校

鳥崎 裕子

1年

「木目込人形」

奈良県吉野町立吉野小学校

島 紀代子

6年

「ぼくのおとうと」

愛知県愛知教育大学付属岡崎小学校

近藤 忠勝

1年



※優秀賞、優良賞、佳作の発表は、作品の受け付け順です。

「さんすうでにこにこまるもらった」

奈良県奈良市立田原小学校

上田 有香

2年

「ぼくの焼きそば売り」

青森県白菊学園小学校

杉本 幸晴

5年

「『せんそうてん』を見て」

愛知県愛知教育大学付属岡崎小学校

鍛冶 清

2年

「せみのうか」

愛知県愛知教育大学付属岡崎小学校

大見 功二

1年

「どうして赤ちゃんうんでくれないの」

愛知県愛知教育大学付属岡崎小学校

安藤 友里

2年

最優秀賞受賞作品

ぼくの大ばあちゃん

愛知県愛知教育大学付属岡崎小学校

2年 大見 芳武

指導者 中神 時彦

大ばあちゃんは、おじいちゃんのお母さんです。今八十六才です。ぼくと、七十八才もちがいます。ぼくたちがいくと、「よう、おいでました」といって、げんかんのろうかにすわって、頭をさけて、むかえてくれる。

大ばあちゃんは、かみがまっ白で、こしがまがついて、手も、足も、顔もしわしわで、いつも、きものをきている。ぼくより少し大きいだけです。でも、こしをのばすと、もつと大きいと思います。

今日、大ばあちゃんと、手をつないでいるたら、フーセンのしぼんだような手でした。手は、やわらかくて、つめたくて、とても気持ちよかったです。手のかかわを、つまむと、山みたいになって、かわとかわとか、ひつついてしまう。いっしょに、あるいても、早くあるけない。大ばあちゃんの足をよく見たら、いっばい足をだして、つぎは足をそろえて、また、いっばい出すあるき方だった。ぼくが、すぐくゆつくりあるかないと、いっしょにあるけない。それでも、少しあるくと、休みます。ぼくが、手をつないでいっしょにあると、とてもうれしそうな顔をします。うれしくてわらうと、目が、しわの中にはいつてわからなくなる。

大ばあちゃん、にわの石にこしかけて、話した。大きな声でいわないで、きこえない。話してくれる時も、声が小さいので、わからない時があるけど、かわいそうだから、二回くらいで聞くのはやめる。おかあさんたちが、大きな声で、よんだり、話したりすると、なんだかわいそうに見える。でもしかたないと思う。ものを教える時、ヒ、フー、ミ、ヨ、

イツ、ム、ナナ、ヤー、ココ、トオ、と教える。そして、むかし学校では、ぼくたちのころ、カタカナをさきにおぼえたことや、おさいほうといつてきものを作るべんきょうが多かったことや、せんそうのこと、大ばあちゃんの子どもが、せんそうについて、太平洋せんそうといふせんそうで、レイテ島の近くで船がしずんで、しんだことを話してくれた。

「せんそうは、いやなもんだよヨツクン、大きくなっても、せんそうだけはやたらいかんてな。」

といった。話をきいて、ぼくもそうおもいました。

一日の大ばあちゃんのしごきは、氣ぶんのいい時に、にわの草をとったり、ろうか、あみものをしている。そして、つかれるとわてている。ぼくたちの冬の、バジャマの上にあるハンコというのは、おかあさんが、小さいころにきたセーターを、ほいて作ったものです。だから、いろいろな色が、まじって、しましまハンコです。今は、もうきれないけど、だいにしまっています。

ごはんは、あまり食べない。おかずは、はが、あまりないから、やわらかいものを食べている。毎日、牛にゆう一本をのみ、バナナ一本か、さつまいものふかしたのを、一こかならず食べています。

「なんで、食べるの。」

と聞くと、

「つうじが、いいからだよ。」

といった。

何でも、ほどけさまに、あげてから、食べている。大ばあちゃんへのやには、トイレがある。

大じいちゃんやしんも、せんそうでしんだ、子どものやしんも、かさってあります。せんぶうきもれいほうも、だいきらいです。だから、うちわが、おいてあります。本を読むのも好きです。いとこの、大きな字でかいてある本を、かりてよんでいます。

「ごはんだから、大ばあちゃんよんできて。」といわれると、ぼくはすこいやです。おへやにいつて、ねていると、何回よんでも、へんじしないので、しんじやつたとおもうから、とってもいいやです。

大ばあちゃんは、いつもニコニコしていて、やさしくて大すきです。すぐ近くにもいて、ぼくと功二とよくまちがえます。でも大すきです。ながいきてほしいとおもいます。

大ばあちゃんを見る目、そこに大見君のあたたかい心、思いやりの心があります。それがことばの一つ一つにあらわれ、きめ細かい描写力でまとめあげています。「フーセンのしぼんだような手でした」など、いきいきと大ばあちゃんのようなすが書かれています。

いすがいいので、わたしは、うなずいてしまつた。

わたしが、とびおる前に、あけちゃんが「ゆかちゃん、もしとんだらシール三枚あげる」と、言った。そのころ学童保育では、シールをあつめて、交換するのが流行していたので、わたしは、「ほんとう、あと、三枚ふえるのね。」やつたあ、と思い、承知してしまつた。

もし、とびおったら、また足がいたくなるだろうな、と思つたけれど、シールが、目の前にちらついていたので「やだ」とはいえなかつた。再び、九段目から飛びおりました。一瞬ずきんとして、わたしは、そのままそこにくずくまつてしまつた。立とうとしても、足に力が入らなかつたので、思いきり足を動かした。

「うっ。いたい。」

と、足を押さえた。その時涙が出てきそうなのを、いっしょうけんめいがまんした。

男の子たちがおどろいて先生をよんできた。わたしは先生におんぶしてもらつて保健室までいった。なんだか、自分がとってもみじめだつた。少しねていたら、父がむかえにきた。父が保健室に入ってきたとたん涙がぼろぼろと流れてきてしまつた。それから、父と教師先生といっしょに病院に行った。

うす暗いレントゲン室に入つたとたん体がひんやりした。とつても心ほそかつた。いろいろ

優秀賞受賞作品

階段からとびおりて

東京都・五日市町五日市中学校

1年 安齋 由香

指導者 漆原 智良

あの日のことは、今でも忘れることができない。五年前の九月。わたしが二年生の時である。その日はめずらしく、わたしたち三組が、一番初めに「さよなら」を言った。わたしは学童保育の仲よし友達、たみちゃん、あけちゃんがおわるのをまつていた。わたしは同じ三組の友達とおしゃべりをしながら、二人を待った。いつもどつたら、二人をまたせているわたしが、今日は、待つほうだったので、ちょっぴり気持ちがよかった。

あけちゃんのクラス（一組）とたみちゃんのクラス（四組）から「さようなら」という大きな声が学校じゅうにひびきわたつた。教室の中から、友達がドバドバと出てきた。それは、鉄ぼう玉のようないきおいだつた。たみちゃんやあけちゃんもみんなにまじつて飛び出してきた。

いろいろなしなをしながら廊下を歩いた。そして、階段まで来たとき、あけちゃんが、「ねえ、ねえ階段のとびおりっこしない。」

と、いい出した。わたしはすぐに賛成した。飛びおりっこに自信があつたからだ。まず、みんなが一段目からとびおりました。そこができたなら、二段目、次に三段目と、一段ずつ、段をふやしていった。たみちゃんは、三段目までで、こわくなつてしまつたらしく、そこでやめてしまつた。

あけちゃんは、五段目まで進んだ。わたしは、なんでこのくらいのができないんだらう、こんなもん、へっちゃらさ、などと思つていた。そのうちにわたしは九段目まで行くことができた。

とつてもうれしくなつた。うれしさと、自信とで顔が紅潮してきた。でも一方ではなんとなく不安だつた。

九段目からとんだ。一瞬風を切つたがすぐ着地した。足がズキツとした。だから、ここでやめておこうと思つた。が、その時、男の子たちがかけ寄つてきた。そしたらあけちゃんが、みんなにこう言った。

「ねえ、ねえ、みんな聞いて、ゆかちゃんすこいから、九段目からとびおりたんだよ。」

と、そしたらそこにいたみんなが、「もう一度とんで。もう一度とんで。」

と、いい出した。初めは、「いやだよ。足がいたいもん。」と、首をふつたが、あまりにもみんなのいきお

きよう、村井くんは五時間めの美化かつどうをしないで、かえつてしまひました。先生やわたしたちは、

「村井くんどこへ行つたのかな。」

と、小さい声で口ぐちにしゃべつたりしてしまつた。先生は、わたしたちが石ひろいをしてる間に、南芳えんをひとまわりしてさがしたけど、いませんでした。

六月十八日 土よう日 晴れ

先生が、村井くんがもつて来てくれた「エルマーのぼうけん」という本を、やつとよみおわりました。よみおわつた時、先生にはく手がいつばい来ました。先生は、

「村井くんが、こんなおもしろい本をもつて来てくれたから、みんなによんであげたんだよ。先生より村井くんにはく手。」

と、いいました。みんな村井くんの方をむいてパチパチパチ大きなはく手をしました。村井くんは、ニコニコしてうれしそうでした。わたしは、村井くんもなかなかいいところあるなと思ひました。

六月二十一日 火よう日 雨

きゆうしよくがおわつた時、先生は、「一年生の先生は、きゆうしよくであまつた。」はんをおにぎりにしてくれるんだつて。」

優秀賞受賞作品

日記（村井くんのこと）

岩手県・盛岡市立城南小学校

2年 石田かおり

指導者 岩館 チヨ

六月十七日 金よう日 晴れ

と、いいました。みんなから、

「いいな、いいな。」

という声がかえって来ました。

「先生も、おにぎり作ってあげる。ほしい人来て。」

といった時、村井くんがコップにお水をくんで来ました。村井くんがおにぎりをつくらうとして、ごはんをつかみました。手に水をつけないでつかんだので、手にごはんつぶがいっぱいつつきました。手のごはんつぶを口でなめたので、かおにもごはんつぶがつきました。先生は、

「村井くん、だめ。」

といいました。村井くんはコップをもったまま、ろう下で、

「ウエン、ウエン、ウエン、ウエン。」

と大声でなっていました。わたしは、村井くんもおにぎりをつくりたかったんだらうなと思いました。

六月二十三日 木曜日 晴れ

四時間目に、体いくでドッジボールをしました。赤組と白組に分かれました。わたしは白組になりました。村井くんも白組でした。わたしは、がんばろうと思いました。がいやがきまつて、センタージャンプをして、赤組のボールになりました。

しばらくしあいをしていると、高木くんがな

げたボールが、村井くんにあたりました。

村井くんが、

「なんだあ。」

といって、高木くんにかかっていきました。

ふじ田くんやすず木くんが、

「いいんだよ。いいんだよ。」

といいました。先生が、

「ドッジボールというのは、あい手にボールをぶつつけるしあいだから、村井くん、やめなさい。」

といって、高木くんから村井くんをはなしました。村井くんは、プフツとふくれて、

「そんなのあるかよお。」

といって、そこにすわつてうごきませんでした。せつかつたのしいドッジボールなのに、村井くんのおかげでだめになりました。

七月八日 金曜日 くもり

きょう、村井くんのおとうさんが、朝から四時間つづけてべんきょうを見ていました。村井くんは、ちゃんといすにすわつて、先生の方を見ていました。村井くんのおとうさんはみんなトイレに行く時になると、
「としさだ、ちゃんと先生のいうこと聞けよ。」と、かならずいっていました。五時間目にはおとうさんがいなくなつたので、村井くんはいつものように、つくえの下で本を見たり、かつて

青森県・白菊学園小学校

5年 土岐真由美

指導者 中村 雅胤

「真由、ちよつと来てごらん。」

タンスを整理していた母が、わたしを呼びました。(なんだらう。めずらしい物でもあったのかな。)と思いながら、母の所に走っていつてみました。

「ほら、かわいいでしょう。真由や泰紀が赤ちゃんの時に着たお洋服だよ。」

と、見せてくれたのは、小っちゃい小っちゃい、お人形さんでも着そうなかわいいお洋服でした。母は、

「これを着て真由は、すいかを食べたんだよ。」

「泰紀によく似合った黄色のお洋服は、これだよ。」

と、わたしに話しているよりは、自分の思い出をたどるように、一枚一枚広げて見えました。「これ、まぶちゃんに使えるかな。使わないよね。」

としまいかけたものがありました。

「それなに。」

「外国のおしめだよ。真由が生まれてすぐに使った。」

と返事がきました。

「外国のおしめって正方形なんだよ。たたみ方、わからなくなつた。」

に教室から出て行ったりしました。

七月九日 土曜日 晴れ

算数の時間、先生がきのうのテストで百点とつた人をよびました。「村井くん」と先生がいきました。みんな「えっ」「うそ」「先生、名前まちがったでしょう。」といってさわぎました。先生が見せたテストは、ほんとうに村井くんのでした。はじめてとつた百点でした。「どう上げしようか」と先生がいったら、ダダダと男の子たちが村井くんのところへ行つて、村井くんをもち上げました。

「ワッショイ、ワッショイ。」村井くんはうれしそうに、みんなからどう上げされていました。

【評】 テーマ日記でも呼ぶことができる特徴性のある作品です。どの学校にも何人かはいる村井君に視点をあてて、しかも村井君へのさまざまな配慮をしている石田さんの人間性のすばらしさに心をうたれます。本をもつてきてくれた村井君、おむすび作りを失敗する村井君、百点をとつた村井君……。村井君の姿が目にはうかんできます。こういう作品が生まれたのは、すばらしい先生、すばらしい生徒たちの学級づくりの成果だと思われまふ。

優秀賞受賞作品

大きくなったねわたし

と笑いながら名前の欄を見せてくれました。そこには「ときまゆみ」とかわいい字で書かれていました。

開いて読んでみると、『ぶたがいないほらぶうぶうおぶたがいるたのしいねおわり』と横書きで書いてあったり、『わあたのしいなこんなりんごがあるよすうごいよかわいそうふたつもおちているよおわり』とか書いてあり、なんだかよくわからない絵がとなりにかかれています。たどたどしい文章ですが幼いころが、よみ返ってくる。なつかしさでいっぱいになってきます。

「小さい頃は、ずい分素直だったな。」

わたしは、小さい頃おしゃべりで、一才半のあたりから、数字を数えたり、形や色の名前を覚えては、よくしゃべっていたそうです。電話でのおしゃべりも大好きでよく五所川原のおじいちゃんとおしゃべりしたそうです。読み書きするのも以外と早くて三才の始め頃から、本を読んだり、字を書いたりして遊んでいたのだそうです。

一番最初に覚えた字は、「ま」。また母はわたしを本好きな子にしようと思いい六ヶ月の頃から、わたしをだつこしては本を読んでくれたそうです。

今のわたしは、そんな母の期待に応えられた

かどうかわかりませんが、本を読むのだけは大好きな子に育っています。

今のわたしは、母を追い越すぐらい背も高くなり、いろいろと勉強してものを覚え、母の手伝いなども出来るようになりました。その他に自分自身の意見を言ったり、その責任も果たせるようになりました。小さい頃から見るどすい分成長したんだなあと思います。

これからは、人に役立つところ、やさしい心を持つことなどを伸ばすと共に自分の言動についての責任をとるなど、いろいろな面を成長させてだれにも好かれる人間になっていきたいと思っています。

こんなことを考えさせてくれたあの洋服と日記を大切にしておいて、いつまでもわたしの宝物にするように少し大きくなったらまた見直してみようと思っています。

その時はまた別のところを教えてくれると思っています。

【評】 幼い頃の洋服や日記を見ることによって土岐さんは、当時の自分のようすをふり返り、現在の成長した自分の姿を確かめています。そして、「自分にとって成長するとはどういうことなのか？」ということを自分に問いかけて、これからの自分の言動について責任をどうとろう、と決意します。忘れていた洋服と日記から、考えさせられた気持ちをしっかりとまとめています。

最優秀賞受賞作品

「羅生門」を読んで

鹿児島県・喜界町立第二中学校

3年

岩元

秀光

丹塗りのはげた大きな丸柱。そして、死人の肉をつつきに来る、からすも飛び去った羅生門。そこには、腐らん死体の臭気の中に、骨と皮と筋張ったさるのような老婆が、一体のしがいを抱き抱えるようにして、その髪の毛を一本ずつ丁寧に抜いていた。目はらんらんと鋭く光って、まるで肉食鳥のようであった。

天下泰平の平安時代の皇室や貴族の人々は、享楽の日々を送っていた。しかし、貧乏な人たちは人間とも思えない物を食べ、猛獣のようにお互いの肉を食い合って暮らしていた。

読み進めていくと、不思議な怪しさや恐怖心が、むらむらと湧き起ってくる。その情景が目に見えるように描かれている。

食べないで生きていけない。そのままでは死んでしまう。進いつめられた生活をしている人々の姿が、はつきりと描かれている。生きて行く人間の魂はすさまじいものである。これは人間同志の激しい生存競争である。登場人物の老婆や下人たちの行動や気持ちは、同じ人間だからよくわかってくる。先へ進むにつれて、息苦しくさえてくる。

読書感想文部門

総評

自分たちの生活を題材として書かれた作文と比較して、読書感想文はややレベルが低かった。作品の荒筋の紹介だけに終ったり、荒筋のどこどこに、または、最後に自分の感想や考えをちよつとつけ加えた感想文が多くありました。読書の感想文は、作品と読者の心の触れ合いです。良い読書感想文は、この触れ合いの深さが大切です。それを作り出すには、まず、作品を十分に読まなくてはなりません。そこから、問題を発見し、それを発展させて、自分でしか書けない個性的な感想を、自分のことばで表現するように努力してください。

最優秀賞の「羅生門を読んで」は優秀賞の「みにくいあひるの子」は、どちらも自分の考えを自分の言葉でしっかりと表現しています。今回は、受賞作品が少なかつたですが、次回の応募を期待しています。

入賞者一覧

最優秀賞

「羅生門」を読んで

鹿児島県・喜界町立第二中学校

3年

岩元 秀光

優秀賞

「みにくいあひるの子」

長野県・中野市立中野小学校

1年

松本 裕美子

「わたしたちのトピアス大きくなる」を読んで

東京都・目黒区立南小学校

3年

湯澤 賢子

「ばらの心は海をわたった」を読んで

山口県・下松市立末武中学校

1年

渡辺 真希子

「子犬が生まれるよ」を読んで

愛知県・名古屋市立楠小学校

2年

中野 涼子

「アンクル・トムの小屋」を読んで

千葉県・船橋市立三田小学校

2年

国分 紀子

佳作

「消えた二ページ」

東京都・文京区立宝町小学校

5年

田和 景子

こう書きながらも、自分自身についてさらに考えてみる。自分でもよくわからない不安な気持ちになつてくる。生か死の分岐点に立たされた時、人間の人間らしい姿で死んで行けるだろうか。びよう変して野獣の姿に転じて行くのではないだろうか。

人間には下人のような激しい心の動きがある。自分がいくら正しい人間であると自覚していても、その場に臨むと、どんなに変つてくるかわからない。全然反対の気持ちが起こって、下人のような行動をとるかもしれない。

こんなことを考えていくと、気が混乱して未だ怖い思いがして落ち着いてはおれない。自分はそのような浅ましいことは絶体にならないと、決心しながらも自信が持てないのである。ここでは、あくまでも自分で自分自身を信頼するより方法はないのである。正邪善悪を基準にして、正善を受し邪悪を排するより道はないと思う。それを実行するには自分の強い意志を持つことである。

切迫した世の中の暗い面ばかりが描かれている。読む過程でもため息が出てきた。むしろ読み終えてほつとすることであつた。

作者の人間の心のどん底を見究めた文章。この世の裏での出来事を如実に表現した文章。一行、一行と、うなずきながら読み進めていった。

読みごたえのあった文章であった。なんとも言えない感動を覚え、忘れられないすっかりした読後感が、ほのぼのと残っている。

評 作品をよく読みこみ、作品を自分のこととし、自分の考えを深めている、読みごたえのある感想文です。岩本君は、「羅生門」に登場する、生活に追いつめられた人びとの生き方を懸命にさぐろうとしています。作品の登場人物の立場に身をおいて、「もし自分が、そういう立場になったらどうだろう。」と、問題を自分に引き寄せて、感想を発展しています。ことばの使い方もむだなく、すばらしいです。

優秀賞受賞作品

みにくいあひるの子

長野県・中野市立中野小学校

1年 松本裕美子

指導者 松本 裕子

みにくいあひるのこをよんでかわいそうだったので、わたしは、いろいろなことをかんがえました。

みにくいあひるのこは、うまれたときからみんなにへんな目でみられたり、わる口をいわれたりしてとてもかわいそう。うまれたときはみんなから、かわいい、かわいいとかわいがられたり、やさしくされたり、たいせつにされるはずなのに。

わたしは、みにくいあひるのこがだれにもあいてにされないで、ひとりぼっちであそんでいるところがとてもかなしいです。

どうして、おかあさんもそしてきょうだいたちも、みにくいあひるのこをすがたが、ちがっているだけで、なかまはずれにするのかな。わたしは、からだのかたちのちがうというだけで、みんなになかまはずれにされるのはとてもかわいそうでかなしくなりました。

わたしは、みにくいあひるのこをよんでいて、わたしのことをかんがえました。

わたしは、3さいになるすこしまえにじぶんのうちのめんいをつくるころのきかいで、右のゆびを4本さきのほうをなくしてしまいました。大きなしじゅつをどうきょうのびよういで4かいました。まだきずのあととたくさんあります。しょうがつこうへ入るとき、おかあさんも、おとうさんも、おねえさんも、おにいちゃんも、わたしのてのけがのことで、かわいそうなことがないようにともしんばいしてくださいました。わたしもみにくいあひるのこのことをおもいだしてすこしんばいしました。それは、てのこでなにかいわれるかもしれないとか、おともだちとてのかたちがすこしちがつているから、なかまはずれにされたらどうしようとしんばいしました。

みにくいあひるのこは、いくらかなしくたって

でどうしようもないと、がんばったのだからわたしもがんばろうとおもっていました。だけれどわたしのおともだちはともしんせつで、やさしくてだれもへんなことをいったり、なかまはずれにはしません。みにくいあひるのこくらべるとわたしはしあわせだとおもいました。みにくいあひるのこはくちようをみてじぶんもはくちようみたいにきれいになれるといいなとおもっていたけど、わたしもおともだちのてをみるとけがをしなければよかったなあとおもうところがいてるとおもいます。みにくいあひるのこは、かなしいことがいっぱいあったけれどさいごになりたいとおもったはくちようになれてよかったなあとおもいました。わたしのおかあさんは、「もうけがをしてしまったことはどうしようもないのだから、あかるく、すなおにいつしうけんめいになんばつていきいていくとあとできつといいことがあるのですよ」といいます。いつまでもみにくいあひるのこのことはわすれないでかなしいことがあつたらおもいます。

評 松本さんは、小さいころに指先を切ってしまった自分の生活体験と「みにくいあひるの子」をみごとに組み合わせながら、淡々と感想をのべていきます。けがにも負けずに、あかるく力強く生きていこうという松本さんの姿勢に心うたれます。